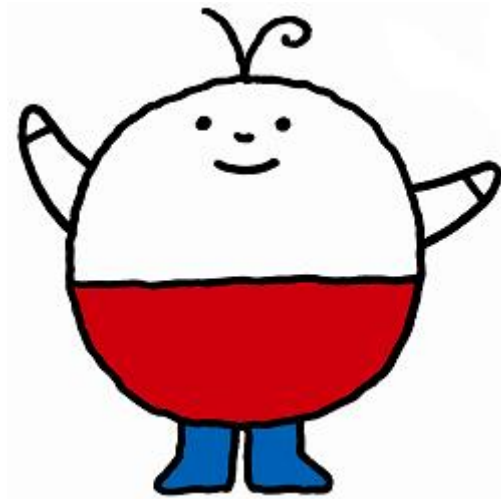


平成 25 年度 福祉教育・ボランティア学習研究会 報告



長野市社会福祉協議会 ボランティアセンター

昨年に引き続き、本年度も福祉教育について情報交換をしたり、多様な人が共に学ぶ場をつくることを目的に、4回の研究会を開催しました。

福祉教育やボランティア学習にはさまざまな切り口があります。しかし、現状は車イスやアイマスク・白杖、手話などの体験学習や、年に一度か二度施設を訪問するだけの学習になりがちです。災害ボランティアも障がい者理解も大切な活動ですが、もっと視野を広げて、身近なことから考えることのできる多様な活動を知って欲しいというのが今年度のねらいでした。

私たちが暮らす地域にはいろんな人が暮らしていて、私たちはその人たちと関わりあいながら生きています。互いを受け入れ、認め合い、成長し合うためには、まず出会い、知り、語り合うことが大切。そのことから、研究会は年齢も性別も立場もさまざまな人が集まる場としました。4回の研究会には毎回30～40人、オプション企画の講演会を併せて延べ223人の方に参加していただきました。感想やアンケートからは新たな発見や気づきがあったことがうかがわれます。

ここで学んだことが、参加したみなさんの周囲へと広がり、さらにそこから地域へと広がることを期待しています。

福祉教育プログラムどうやってつくる？

平成 25 年 6 月 14 日 18:30~20:30

今年度第一回目の福祉教育・ボランティア学習研究会。集まったのは学校の先生、住民自治協議会のみなさん、地域福祉ワーカー、老人福祉センターの指導員、学生など本当にさまざまな立場の人たち。

日頃福祉教育のプログラムをどう作っていったらいいのか、疑問や困っていることがみなさんあるのでは？ と思い、参加者が一緒にプログラムをつくる過程を体験しようと企画しました。それぞれの立場、それぞれの人が持っている情報や思いを合わせることで化学反応が起きておもしろいものがうまれてくることに期待をしながらテーマを投げかけてみました。



30人以上の方で熱気ムンムン

3つのテーマで話し合い

事例①

A小学校3年1組のS先生。

クラス替えのあったクラスに他校から赴任してきました。クラスは落ち着かない雰囲気。保護者も冷めていて関係作りが課題と感じています。

また、先生は子どもたちと一緒に地域に出て、いろんな人に出会いたいと思っています。でも、赴任したばかりで地域のことは何もわかりません。さて、どこからどうしていったらいいのやら・・・。

事例②

B小学校6年1組のN先生。

5年生の時に作ったお米が余っています。子どもたちとそれをどうしようかという話をしている中で、「子どもたちが地域の人のためになることをしたい」と思っていることがわかります。

できるだけ、子どもたち発で、地域とかかわる活動をしたいと思うのですが、地域の人たちがどんなことを求めているのか、先生自身もよくわかりません。何ができるでしょう？

事例③

C老人福祉センター指導員Aさん。

以前、障がい者施設の方から聞いた話がずっと気になっていました。視覚障がいの女性がトイレを探している時に、サポートしようとした男性が突然腕をつかみ「どうしました？」と聞いてきたのがとても怖かったそうです。

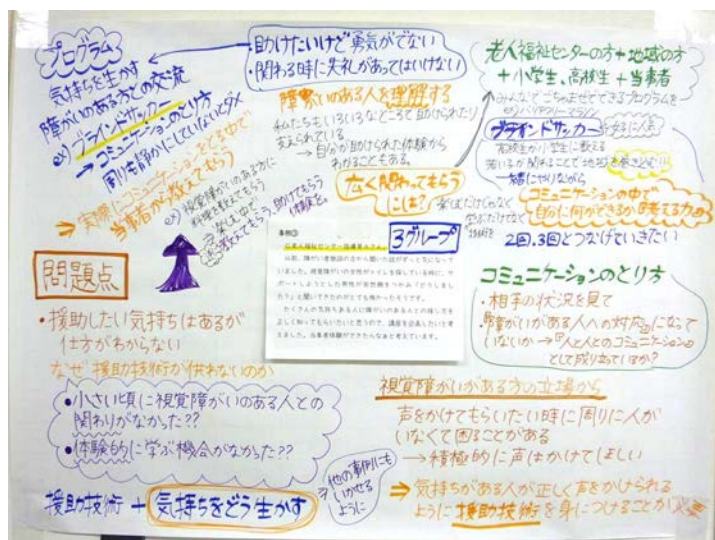
たくさんの気持ちある人に障がいのある人との接し方を正しく知ってもらいたいと思うので、講座を企画したいと考えました。当事者体験ができればなぁと考えています。



グループごとに与えられたテーマを、どうするか話し合っていきます。地域のおじさんおばさんと学生と一緒に話す機会などなかなかない中、驚きや共感が生まれていきます。

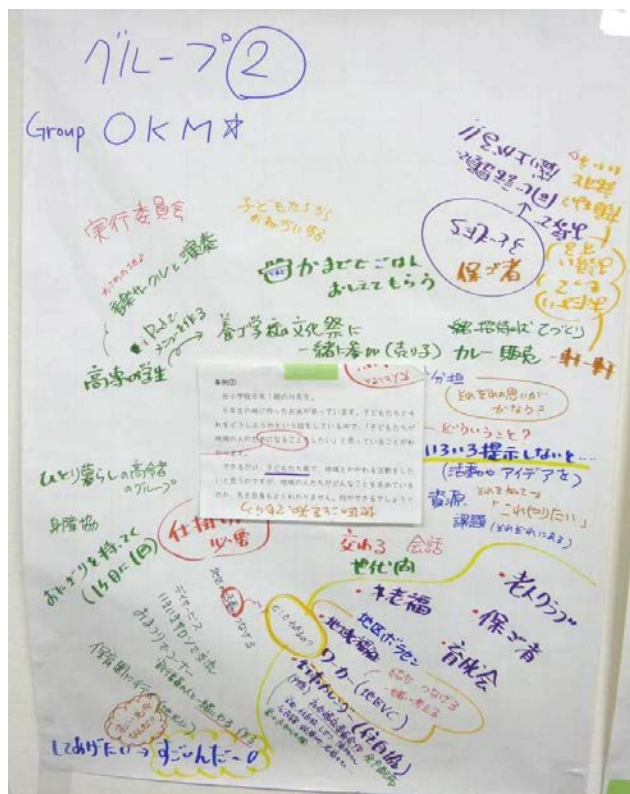
当事者の方からの意見やふだん福祉の仕事をしている人たちから、みなさんが知らなかった現実や現場の課題も話してもらいました。話し合っているうちにみなさんからどんどんアイデアが出て、「もしかしたらこのまま実現しちゃうんじゃない？」というところまで行くグループもありました。

例えば、事例①を考えたグループからは「まずは、先生自身が地域へ出て地域の人と出会う！」とか「地域の高齢者と一緒に畑作りをする。そこに保護者も参加してもらえばいいのでは?」「住民自治協議会の地域福祉ワーカーに相談すればいい」などのアイデアが出てきました。



事例②では、「地域の人にかまどでご飯を炊くのを教わってみたら?」「地域にある高校や特別支援の学級と一緒にカレーを作って文化祭などで売ってみたら? メニューはタブレットで見せよう」などなど次々提案が。

事例③を話し合ったグループでは、「そもそも障害ってなんだろう? 理解できているだろうか」「助けが必要なのかもわからないのがぶつうだ」と熱い議論が交わされました。そして、「出会ってみる、その人を知ることから始まる。子どもも高齢者も一緒に当事者の話を聞いてみたらどうか」などのアイデアも。



実は今回与えられたテーマは、実際にボランティアセンターに持ち込まれた相談なのでした。そして、持ち込んだ本人も来ていた！ というおまけもついていました。実際にはどんなプログラムになったかとそのプロセスも聞くことができました。

ボランティア学習や福祉教育のプログラムを考えると、既成概念にとらわれない柔軟なアイデアと、地域や課題の周辺にある社会資源（ヒト・コト・モノ）を洗い出し、点と点をつなぎ合わせていくプロセスが大切です。そして、そのプロセスこそ実は福祉教育の大切な部分でもあるのです。



グループで話し合ったことを発表する高専生。研究の役に立ちそうですね・・・？



私たちのグループは、こんな風に考えました。できることがいろいろあります！

<ふりかえりシートから>

- ・ふだんの学校の教職員の集まる会合でなく、他の多くのお仕事や立場の方々と情報交換ができて良かった。住民自治協議会やワーカーさんのことを知らなかったので勉強になった。
- ・多くの人と意見交換ができてよかった。人が集まれば様々な意見があるが、同じような考えを持った人が多くて驚いた。
- ・具体的な例を上げて解決法を考えるというのはふだん無い経験だったので、とても面白かった。
- ・グループ⑤は、学校に関わるグループで、現在の自分の学校でのことを基に話をさせてもらいました。グループの方はいろいろな立場の方々と、自分の関心ある内容について様々な考えを話していただいたので、自分の考え方が少し広がったのかなと思いました。いろいろな人と関わるのが大切だと感じました。学習研究会に参加させていただきとても良かったです。

平成 25 年度 福祉教育・ボランティア学習研究会 オプション企画

岩手県大槌町大槌中学校鈴木利典先生講演会 「こどもたちは未来の設計者」

平成 25 年 7 月 8 日

大槌中学校校長鈴木利典先生に、遠路はるばる長野まで来ていただき講演していただきました。

準備期間が短かったにも関わらず、長野市内の小中高、大学、短大含む 14 校の先生方、学生、災害ボランティア登録者、一般の方など 80 名にお越しいただきました。



当日会場では、災害ボランティア委員会による震災ボランティアのパネル展示と T シャツの販売もありました。



先生のお話しは、

- ・先生自身も被災者でもあり支援者でもある
- ・大槌町や沿岸部学校の被災状況
- ・学校の正常化
- ・心のケア
- ・生徒たちが部活動や吹奏楽、合唱などで頑張っている姿

など 90 分にわたり、写真や動画を見せながらお話ししてくださいました。先生の復興教育に対する考え・取り組みは、聴講された方に強く響いたことと思います。

講演の後半に話されたお話しが印象に残っています。先生の一番好きな写真は、仮設校舎を膝をつい

て磨く生徒の写真だそうです。その姿を、故坂村真民さんの詩「鈍刀を磨く」に喩えてお話ししてくれました。

今の中学生たちは、仮設校舎のまま卒業していく。生徒たちにとっては仮設ではなく本校舎なのです。その校舎を一生懸命磨いても光らないが、磨いている生徒の心が光るのです。

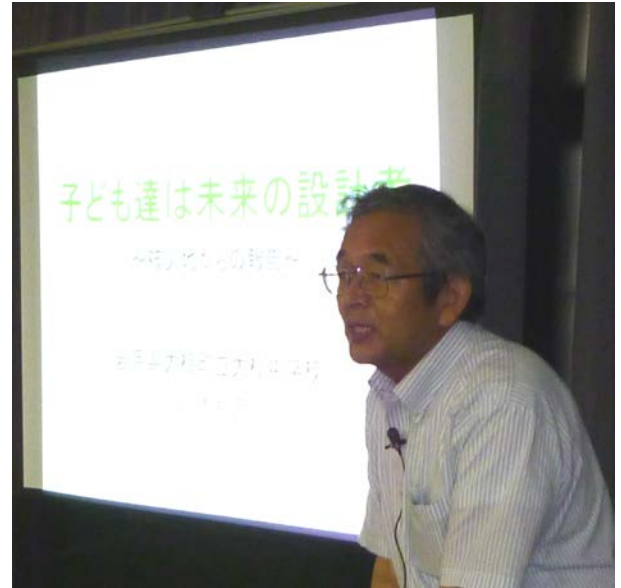
<アンケートから>

聴講された方々へ先生の思いが届いていました。

- ・「豊かな経験」、「鈍刀を磨く」未来へつながるキーワードに感じました。
- ・皆で楽しい経験を重ねていらっしゃる大槌中学校を応援したいです。私は小学校教員ですが、学校で様々な問題に直面すると心が萎えてしまいます。しかし、東北の地で頑張っているみなさんのことを忘れずに、同じ時代を生きていることに連帯したいと思います。
- ・素晴らしい出会い、経験をたくさんしている子どもたちが、たくましく豊かな大人になっていくことを心から願っています。
- ・講演をお聞きして改めて胸が痛くなる思いでした。生徒たちが復興に頑張っているその様子がよくわかりました。
- ・人間としてとても魅力的な先生でした。まだまだお話聞いていたいと思いました。
- ・大槌中学校で、今、床を磨く生徒さんたちが、どんな大人になっていくのか楽しみです。

先生の撒いたタネが長野市で芽が出ることでしょう。そして、また先生を長野にお呼びできるようにしたいと思います。

(南部ハナマガリ鮭Tシャツプロジェクトブログより転載)



避難所運営ゲーム HUGをやってみよう！

平成 25 年 8 月 8 日 13:00~16:00

今回の研究会は、災害という切り口から地域について学ぶことができる避難所運営ゲーム「HUG」を体験しました。災害時、学校はもとより公民館や福祉施設などは避難所として活用される地域にとって大切な施設です。災害が起きてすぐに機能する必要がありますが、必ずしもそこに勤めている職員がいる時間とは限らないのが災害です。地域に暮らす私たち自身も避難所の運営にかかわっていくこととなります。そんなとき、地域に暮らす多様な人々の姿が見えていないことは混乱を招く原因になります。そこで、このゲームを体験し、「地域に暮らす多様な人々の存在に気づく」ことを知ってもらいたいと企画しました。

長野県危機管理防災課の番場さんに出前講座をお願いして、HUG進めてもらいました。最初は、東日本大震災の時、避難所がどんなふうに運営され、何か課題であったかなどをお話してもらいました。

そして、いよいよゲーム開始です。避難所として設定された学校の平面図上に次々と避難してくる人々をどう配置するか、何を配慮するか、どんなルールを作っていくかなどをグループで話し合いながら進めていきます。避難してくる人は 1 人が 1 枚のカードになっています。そこには、名前や住んでいる地区、年齢や家族の構成の他、障害の有無や病気のこと、もっているニーズなどが書かれています。グループの中の 1 人がそれを読み上げていきます。



まず体育館をいくつかのブロックに分けていきます。



認知症の高齢者と家族であったり、重度の知的障害の子どもと家族、中にはペットを連れた人や「テントで寝たい」という人、子どもだけで避難してきたなど間髪おかず次々とやってくる人に加えて、炊き出しが来たり物資が届いたり総理大臣やテレビ局もやってきます。

参加者のみなさんは、意見を出し合って「物資を置く場所は体育館の舞台だね、車はロータリーのようになったところでスムーズに出し入

れしたいね」「子どもだけで来たなら同じくらいの子どもがいる家族の近くがいいのでは?」「できるだけ同じ地域の人を近くに入れてあげたいよね」「タバコを吸う場所も決めないと」などカードや気づいたことを書いた付箋を図面に置いていきます。

認知症の人は別の部屋にしてあげたほうがいいんじゃないかな? スペースがたりなくなったりしないかな?



みんなが過ごしやすく、不安がないようにするため工夫することが求められ、さらにスピードも必要です。グループの中でも考え方の違いがあって、すぐに場所を決められないことも多々ありました。ですが、実際の災害時には待たなしです。日頃から地域のさまざまな人たちの存在を知りかかわりあうことの大切さを痛感します。

校庭もフルに活用していきます。駐車場? 喫煙所? 仮設トイレもやってきます。

互いの意見に耳を傾け、何が最善か考えた結果、グループによって配置の仕方はいろいろでした。他のグループの図面を見て「なるほど」と思った方も多かったのではないのでしょうか。

<参加者の感想から>

- 様々な状況の方が避難するのだということが実感できました。想像力の大切さを実感し、ふだんから相手の立場に立ったり先を見通す力をつけていきたいと思いました。ゲームを行なったので、いざというときには役立てそうです。
- はじめて会った人たちと今までの知識、経験をもとに話し合うことが楽しかったです。地域に多くの人々が住んでいる中で、私たちそして子供たちが何ができるのか考えるきっかけになりました。
- 大変参考になりました。自主防の方々に聞いてもらいたい。地域の普段からのコミュニケーション作りをしなくては、と思いました。
- 地域を知っておくこと、(人も)が大切!と改めて感じました。知っておくことで、いざという時にも、また、日頃の暮らしにとってもよいことが沢山あると思います。仮想の街ですが、やっぱり地域には色々な人が住んでいるんだな—とも思いました。

地域・学校×施設＝∞！

日々の暮らしの中で私たちはさまざまな人と出会い、関わりながら過ごしているのですが、地域では、まだまだ障がい者施設や高齢者施設は特別な場所というイメージが強く、そこに通ったり暮らしている人と関わることは多くはありません。

障がいのある人も、高齢者も外国籍の人も、みんな地域の一員。でも、出会えないから特別に出会える場と時間を作って「交流」という名の下に意識的に出会いを作っている地域や学校が多くあります。その半面「交流」が一時的なものでなかなか継続できていないと感じることも多くあります。一度会っただけでその人のことを理解できるでしょうか？ 出会いを活かすためになにかできることはないのでしょうか。

今回の研究会は、施設と地域の人々が関わるということをテーマに、継続的な「交流」を実現している事例を共有しながら、そのあり方について参加者と感じたことを出しあってみました。



車座に座って近い距離で話を聞く

♪ 事例から ♪

■ 若穂・保科小学校とアトリエCOCO ■

若穂の保科小学校の児童と、障害者が働く施設アトリエCOCOは、継続的に交流活動をしています。その名も絆プロジェクト。子どもたちは、障がいのある人たちと交流することで、段階的に「みんなともだち」＝ノーマライゼーション(*)の概念を心と体で学んでいます。

保科小学校篠原賢朗先生、アトリエCOCO施設長綿貫好子さんにお話を聞きました。双方にと

篠原先生と綿貫さん



ってこの交流がもたらしたものはとても大きな意味があったようです。施設では、利用者のみなさんが楽しんだり喜んだだけでなく、職員の意識向上ややりがいにもつながっているそうです。一方子どもたちの中には、「障がいのある人＝特別な人ではなく、自分たちと同じ」という意識が生まれていきます。綿貫さんが子どもたちに話した「みんなともだち」という言葉は、その家族にも波及し、地

域へと広がっています。子どもを介して地域と施設が関係を深めていくことで、排除しない、認め合い助け合う地域を作っていく様子がわかります。今後は学校全体での交流につなげていくことができたらと目標をもって継続しています。

(*) 「障害者を排除するのではなく、障害を持っていても健常者と均等に当たり前に生活できるような社会こそがノーマルな社会である」という考え方

■鍋屋田小学校とハートネット桜枝町■

鍋屋田小学校とハートネット桜枝町からも事例を紹介してもらいました。担任の栗林孝成先生は交流のきっかけを「子どもたちに優しくなって欲しかった」と話します。そのため、いろいろと準備をせず、子どもたち主体で活動してきました。施設の職員入江智子さんからは、「子どもたちが来てくれるのがうれしくて、高齢者はそれを楽しみにしていた」様子を話していただきました。

とはいえ、交流を始めるのも継続するのも簡単だったわけではなく、スタッフ間での調整や日程の調整など苦労はあったようです。それでも続けてきたのは、回を重ねることに関係が深まり、気持がつながっていくことがわかったから。

昨年交流していた子どもは、1人のおばあちゃんと電話番号を交換し、春休みにおばあちゃんに誘われて仲間と一緒に食事にてけたりもしたそうです。おばあちゃんにとって児童は孫のような存在となっていたのかもしれません。

■皆神ハウスと地域のみなさん■

松代の精神障がい者の施設皆神ハウスは、開設当初から地域とともに歩む施設を目指してきました。地域に理解を求め、一步一步ともに歩んできました。今では、施設の利用者は地域から受け入れられ、求められる存在になりつつあります。

コンサートや体操教室、出張ラーメンなど、施設のイベントに地域のみなさんも参加したり、春には地域の方が山菜を採ってきてくれたり。また、地域のみなさんが利用できるお部屋もあります。障がいのある人たちが講師になって地域の講座などに出向くこともあるそうです。

高齢化した地域を障がいのある人たちが元気にしている様子は、地域にとっても施設は重要な社会資源であることを物語っています。

♪意見交換♪

3つの事例を聞いた後は、互いに感じたことを出し合ったり、質問したり的时间です。

ある高齢者施設の職員からは「施設内でのボランティア受け入れの意識に温度差があって、みなさんはどうしていますか？」と投げかけがありました。それに対し、「施設長の考え方を変える！」「いやいや、1人の職員でもいいから地道に実績を積み上げるべき」「前向きに！ 始めたらなんとかなる」など参加者からの意見が。



音楽会ご招待

暑かった夏も終わり、秋本番…
読書の秋、食欲の秋と秋は何をするにも
過ごし安くまた、楽しい季節ですね。
さて、先日鍋屋田小学校からハートネット桜枝町に
入居されている皆さんを音楽会にご招待したいと
連絡がありました。
鍋屋田小学校で行われる音楽会と一緒に
出掛けませんか？
ご希望の方は、10月11日(金)までに施設長入江
又はヘルパー職員までお申しつけ下さい。

★日時:10月29日(火) 午前中
★場所:鍋屋田小学校体育館
※学校までの移動についてはこちらで
ご用意いたします。
※その他、ご不明な点は施設長
入江までご確認ください。



今年10月、小学校の音楽会に、高齢者のみなさんをご招待しました。



また、「施設を地域の子どもたちが寄り道できる場所にしたい！ 縁側で宿題やったり一緒に遊んだり」と夢を語ってくれた方もありました。

「ボランティア体験に来た中学生が施設内の草取りをしていたが、とてもつまらなさそうだったので年寄りとお茶飲みしてもらったらすごく楽しそうにしていた。先生方は何をさせてくたして施設に来させているのか？ ふれあってこそ意味があると思う」という学校に対する要望も飛び出しました。たった一度しかない活動が楽しくなければ、二度とボランティアをする人には育たないのでは？ と心配する声も。学校側からも「時間的制約で教員も余裕がなかったのかも」しれない。厳しい現状なのは確か」と悩みが出されました。



さらに、事例から「実際に会って手をつないでみる・・・体温を感じる、においを感じる、それに勝るものはない」と思った。大人になった時にきっと思い出してくれると思う」という感想もありました。たとえ多くの時間が割けなくても、心に残る交流はできると思えます。

続けることも、受け入れることも労力が必要ではありますが、継続的な交流が地域・学校と施設をより近い存在に変えていく原動力になるのかもしれませんが。認知症、高齢者、障がい者への理解も身近な場所での出会いが一歩となるのでしょうか。

ふつうって何だろう？ みんなで考えてみよう！

私たちは、ふだんの生活の中で、「ふつう」という言葉をあまり意識せずに使っています。でも、よく考えてみると、「ふつうの人」とは誰のことなのでしょう？ 「ふつうの場合は」ってどんな場合なのでしょう？

たぶん、私たちは何か「特別なこと」や少数派に対して「ふつう」という言葉を使っているのかもしれませんが。でも、「ふつうの人」はみんな同じ人ではなく、やはり1人1人違うはず。そんなことをワークショップを通して感じてみようというのが今回の研究会でした。

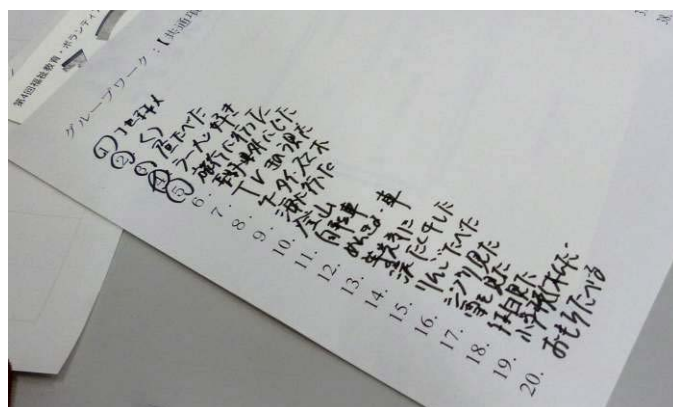
講師に信州大学教育学部伏木久始先生をお招きし、先生が日頃関わっていらっしゃる学校や子どもたちの例を話していただきながら、心と体を動かしました。

集まったのは学校の先生をはじめ、住民自治協議会の関係者や施設・行政の職員など。

最初はウォーミングアップ。グループ（5～6人）の中で、互いの共通点を探します。グループ



「今日車で来た人！」
がしていきます
共通点をさ



によって20以上みつかるグループもあれば、10がやっとというところもあり。視点を広く柔軟にもつことが共通点をさがすのに有効なようです。

続いて、自分の周りの人たちについて「やりたいことが見つからないようで、何事にも『無気力』『無関心』『自分が悪いのに、注意のし方が気に入らないと逆ギレする』など五つのタイプの人の割合を各自表に記入していきます。グループの中で全員の答えが合ったところはほとんどありませんでした。その人の周辺環境もありますが、人それぞれ感じ方の違いも認識できます。

	1	2	3	4	5
シヨウ	40	20	20	40	20
ムネ	0	0	0	20	20
ミヤ	0	40	20	40	60
ユズ	20	20	20	40	20
カズ	20	0	60	40	80

全員が同じ答えにはならないのが大切です

伏木先生は、「人は自分を「ふつう」に所属していると安心という気持ちがある。でも、集団の中で『ふつう』を疑う勇気も必要」と言います。さらに、「私たちはそこにある情報と自分の過去の経験

から物事を判断する。過去の経験はそれぞれ違うのだから、本質を誤認することがあたり前だということが原則」とも。



次は、各自がグループのみなさんに自分の経験を三つ話すのですが、そのうち一つはウソを混ぜます。グループの人たちはそのウソを当てる、というもの。ウソを見破られないようにするには、できるだけ他の人とは違う経験、いろいろな経験を自分の過去から掘り起こす必要があります。その結果、みなさんの体験談は本当に個性的なおもしろいものになります。そして、人は一人一人誰とも違う「私」なのだということが実感できます。

つまり、これだけ人とは違う「私」を「ふつう」と思い込むことは偏見や差別につながると伏木先生。裏を返せば「ふつう」の中にいると、何か課題を抱えていても気づいてもらえないという可能性も。

伏木先生は、私たちが「ふつう」と思っていることが実は違うという事例もたくさん出してくださいました。「子どもたちが集団登校すること」「漢字とひらがなとカタカナを読み書きできること」「ほとんどの学校に体育館とプールがあること」など日本の長野にずっと暮らしていると疑問に思わないことが実はもっと大きな枠で見ると少数派で、「ふつう」ではないかもしれないということです。

最後に、伏木先生からのメッセージ。

- ♥ つねに自分を見ているもう1人の自分をもとう
- ♥ 私たちの見方には限界があることを知り、他者に対して尊敬の心を持って接することが大切
- ♥ あなた自身も「ふつう」な人ではなく、他の誰とも違うスペシャルな存在。だから、いつも自分らしくありたい



短い時間でしたが、とても密度が濃く、楽しい時間となりました。